

切手の失敗作

梁瀬健

切手はその国の文化を表している。特に美術切手は手紙を美化し、受け取った人に好印象を与える。しかし、封書や絵葉書に美しい切手を貼るだけでは、ちょっと物足りない。私は、美術切手と同じ図柄の絵葉書を探し、セットにして使っている。例えば、喜多川歌麿の「台所美人」の絵葉書を東京国立博物館で求め、これに昭和五十九年に発行された切手趣味週間の「台所美人」の切手を貼れば、見事なセットができあがり、受け取った人を驚かせることになる。しかし、これだけではまだ不十分である。それはこのセットをポストに投函してしまうと、切手の上に黒々と消印されてしまうからである。これを避けるためには、風景印という特別な消印を用意している郵便局へ行き、この風景印での消印を依頼するのである。風景印とは、直径三センチほどの消印で、その地方の名所旧跡、物産、伝説など

のイラストをあしらっている。インクの色は赤褐色である。郵便窓口で、この風景印を切手の右下に僅かにかかるように押印してもらおう。そのためには、切手の右側に三センチほどスペースを空けて、宛名を書かなければならない。全国には、一万局ほどの郵便局が風景印を備えている。私の最寄りの郵便局、奈良西郵便局の風景印は、「秋篠寺本堂と伎芸天」の構図である。他に例をあげれば、奈良中央局は、「猿沢の池からの興福寺五重塔と鹿」、西ノ京局は、「薬師寺東塔と東塔の水煙飛天」、東向局は、「東大寺二月堂と籠松明」の如くである。このように配慮すれば、美しい切手とたのしい風景印によって、平凡な郵便物も大変気の利いた贈り物に変身する。菱川師宣ひしかわもろのぶの「見返り美人」のセットに、千葉県保田郵便局の「見返り美人」の風景印を押印すれば、これは見事な三点セットとなる。菱

川師宣は、この保田の出身なのである。

私は、このような絵葉書・切手セットをこれまでに三三種以上作っている。外国のものを加えれば、五千種を越えている。この美しい美術切手を含め、これまでに発行された切手の中には、失敗作と思われるものがいくつもある。ご愛敬と云えばそれまでであるが、その失敗作について述べてみようと思う。

完全失敗作と云えるものは、昭和二十四年発行の国体(冬季)切手(図-1)である。スカートをはいたフィギュアの女子選手が、軽やかに滑走している図である。その左足の後方には白いシユプールが描かれているので、女子選手は前進しているように見える。ところがスカートは風をはらんで、前方が大きくふくらんでいる。つまりこれはバックで滑っているのである。原画の作者は、写真を参考に



図-1

にして描いたと思われるが、前進と思ひ込み、後方にシユプールを描いてしまったのであろう。六十年前の女子選手ユニホームは、このようなブラウスと膝までのスカート

であったのである。

次に述べるものは、失敗作というより、原画の重要部分をカットしたため、画題と合わなくなったり、意味が不明になっているものである。切手原画作者の配慮が足らなかつたと云えよう。

昭和四十七年発行の切手趣味週間の切手、中村岳陵筆「気球揚がる」(東京国立近代美術館)は、双眼鏡を持った鹿鳴館美人が、空に揚がった気球を見ようとしている図である。ところが切手では、原画に描かれている気球がカットされているため、この鹿鳴館美人が何をしようとしているのが分からない。気球まで入れると人物が小さくなってしまうからであろうか。

昭和五十三年発行の国宝切手には、俵屋宗達の「源氏物語滌標(図屏風)」(静嘉堂文庫)が採用された。原画は、「源氏」が住吉の松原で相手方の「明石の上」の船を見送っている場面である。ところが切手の方では、住吉大社の太鼓橋と「明石の上」の船がカットされている(図-2)。これでは、全く意味をなさなくなっている。原画の一部をカットする時には、題意を損ねないようにする配慮が当然必要である。



図-3



図-2

同じく昭和四十七年発行の国宝切手に、久岡守景筆「納涼図屏風」(東京国立博物館)がある。原画は、へちま棚の下で夕涼みをしている三人の家族が描かれ、空には淡い月がかかっている。納涼とは夏の夜の行事である。一方、切手では、月がカットされていて、これまた、いつ何をしているのかが分からない(図-3)。

平成二十一年に発行された「日本・オーストリア交流年」の記念切手は、上村松園作「秋の粧」(西宮大谷記念美術館)であった。原画は、二人の和服姿の女性の足元に、紅葉が散っている秋の風情を描いた作品である。しかし、切手では、女性の上半身だけになっている。そのため、秋を表す足元の紅葉もカットされ、シーズンが分からなくなり、「秋の粧」の画題に合わなくなってしまった。

サントメ・プリンシペが、平成十六年に出した美術切手に、ロートレックの「赤毛の女」(オルセー美術館)がある。上半身裸体で座っている踊り子を後方から描いている。ところが、切手には小さくドガと記してある。一見「踊り子」風であるから、ドガの作品と思い込んだのである。新興国の中には、外資獲得のため、美しい切手を発行しているところが多い。この場合には、アメリカなどの商社がその制作に関与しているという。

ドイツが発行した音楽切手に、シューマンの肖像とその作品の楽譜を組み合わせたものがあった。しかし、発行後、楽譜はシューベルトの「さすらい人の夜の歌」と判明し、ドイツ政府は訂正したものを新たに発行した。うっかりミスであるが、これに気づいた人は相当な音楽通であるに違いない。

どのようなことにも、エラーはつきものであるが、このように、エラー切手にも、いろいろなタイプがあって面白い。